

近世日本のヨーロッパ^{エムブレム}譬喩画受容： 文と絵の関わり（『訓蒙画解集』を軸に）

Ivo SMITS

はじめに：西洋人が好む「譬喩の画」

周知のことであるが、「鎖国」というイメージがついている近世日本には様々な西洋の物体や概念が入ってきて、日本人に分析され、好まれ、応用されてきた例がいくつかみられる。当時はオランダ人が長崎の出島に滞在し、その習慣はよく日本人に興味深い物であった。

例えば、天明七年（1787）の『紅毛雑話』^{こうもうざつわ}に、森島中良^{もりしまちゅうりょう}（1756? - 1810）が「紅毛人葬式」という項目に、来日直前渡海中に病死したオランダ^{カビタン}商館長ジュールコープDuurkoopの葬式を記述する段で、その墓石を次のように注記している。

石碑は横石なり、横文字にて銘を刻む、石面の一傍に、砂時計の両方に鳥の翼を置たる紋を彫付たり、是は我国の判事紋の様なる事なり、（中略）彼国の人、譬喩を画に書く事多し、大抵此類の画組なり^①

その翌年のことであるが、長崎遊学の司馬江漢^{しばこうかん}（1747-1818）もジュールコープ（「ヅウルコプ」）の墓を訪ねる。やはり、あのオランダ人の墓石は異文化に興味を持っている日本人にとって、長崎の名所に近いものになりそうであった。江漢は墓石を描き、そして寛政六年（1794）の紀行文『西遊旅譚』^{さいゆうりょだん}にそれを記述している。墓石の段に、江漢が部分的に挿絵を担当した『紅毛雑

話』の影響もあるが、特にジュールコーブ墓石の異形なる譬喩画を中心にして
いる。

ワランダジン ハカ 和蘭人ノ墓 悟真寺ニアリ ツウルコプト云、カピタンノ塚ナリ、彼樹国
ノ法ニテモ臥タルマ、葬ル也、碑ニ文字ヲ彫テ金色ヲ入、上ニ時計ヲキザ
ム、言^{イフコ}口^{ロウコク}ハ漏刻ツキタルト云譬也、彼国ニテモ教トスルコト多シ、画ノ
コトヲ則タトエトイヘリ、又彼国ノ画^{リヤウヨク}中ニ^{ジンブツ}両翼アル人物ハ異形ナル図アリ、
皆タトヘラ画^{グハ}シタルモノナリ、カツテ羽ノアル人ノアルニハアラズ^②

文化七年（1810）に完成した著作『独笑妄言^{どくしょうぼうげん}』にも江漢は西洋天使のような
「異形」のものに関して次のように述べている。

和蘭之を謂て「シンネベール」ト、即論と云事なり、彼国秀才ある人の像
にハ必如鳥の両翼を画、徳ある人にハ光明^{カク}を描、是真に羽あるにあらず、
光明あるにハあらず。其才と徳を称歎する事にて真に羽翼あると思ふハ大
愚と云べし^③

ほぼ同時代の早稲田大学所蔵「石川大浪^{いしかわたいろう}天童図」という洋風画家の石川大浪
（1765-1817）が描いた洋風「天童」は、そういう「彼国ノ画^{リヤウヨク}中ニ^{ジンブツ}両翼アル人物
ハ異形ナル図」の具体例になりえるであろう。^④ 実際には存在するわけではないが、
才か徳などを表現できる「異形」は日本とずいぶん異なっている洋画の機能の
ひとつで、もっと知るべきものであるとは、江戸の知識人が認識していたこと
であった。一般にヨーロッパ人が譬喩画を好んでいるとの認識は他の例を見て
いても分かるようになる。

「わが日本の人、究理を好まず」^⑤と悲しんでいた司馬江漢は、才能、好奇心
に満ちた人で、残した作品の中には鈴木春信^{すずき はるのぶ}（1724-1770）に学んだ浮世絵、
洋風画、日本初の銅版画、蘭学に関する随筆や紀行文がある。江漢という人物

は興味の幅が広く、特に蘭学を通じて西洋技術をいくつか勉強してきた。その技術は大抵、絵の技法に関係あるが、その価値は「写生」や周りの世界をもっとよく理解するにあった。

近世における日本版イソップ寓話

江漢の興味はヨーロッパの文学までも及んでいた。特に、イソップ寓話(『伊曾保物語』)を必死に読んで晩年の作品に重要な影響も与えた。周知のように、近世日本における西欧文学の紹介は『イソップ寓話』に始まる。文禄二年(1593)刊のキリシタン版天草本『エソポのハブラス』ESOPONO FABULASがその出発点にあたるが、当時もっと知られていたと思われるものは慶長元年～万治年間(1610～1660頃)刊の古活字版『伊曾保物語』であろう。天草版『エソポのハブラス』は、長崎の天草のイエズス会によって発行されたもので、1590年にその^{visitor}巡察使アレッサンドロ・ヴァリニャーノ Alessandro Valignano(1539-1606)によってもたらされた印刷機で、ローマ字を使って印刷されたキリシタン文学作品の一つの例である。当時、『イソップ寓話』はヨーロッパに於いて、読みやすく教訓的な教本としてよく使われ、天草版はイエズス会のコレジオの日本語の教科書の役を果たすものでもあったようである。天草版の序文にはこう書かれている。

Core macotoni Niponnno cotoba qeicono tameni tayorito naru nominarazu,
yoqi michiuo fitoni voxieye cataru tayoritomo narubeqi mono nari.

(これ真に日本の詞稽古の為に便りとなるのみならず、善き道を人に教へ語る便りともなるべきものなり。)

天草版イソップ寓話のもう一つの興味深い点は、口語体で書かれた日本語訳であることである。

ついで、慶長元年から万治年間にかけて、様々な古活字版による文語体の国

字本『伊曾保物語』（三巻本）が出版された。中に、万治絵入本『伊曾保物語』は多分一番よく知られているであろう。国字本の構成はイソップ（伊曾保）の生涯（上巻、中巻（初頭））とたとえ話（中巻、下巻）からなる。そのたとえ話の典型は「○と○（と）の事」（例えば「鶏と狐との事」）である。天草版との差異が多少あり、口語体のローマ字本と文語体の国字本は、天正年間後半（1580代）の日本語訳と思われる「原・イソップ寓話集」に基づく可能性が高いであろう。いずれにしても、十七世紀末よりどんな形のイソップ寓話も読まれなくなっていたようである。

司馬江漢とイソップ寓話

司馬江漢は、晩年に『伊曾保物語』に興味を持ち、四、五の著作の中でイソップ寓話に触れている。特に、『春波楼筆記』（文化八年（1811）成立）、『無言道人筆記』（文化十一年（1814）頃成立）、『訓蒙画解集』（文化十一年（1814））^⑥が重要な資料になる。また、当時の江漢の絵画の中には文化八年（1811）の「伊曾保物語図」や文化九年（1812）の「Senne Beerden（シンネベール）」もある。

『春波楼筆記』に江漢はイソップ寓話との出会いを次のように述べている。

伊曾保物語と云ふ書は西洋の訳書なり、其の原本紀州侯にあり、予直に見たり、皆譬を以て教を設く（中略）此の書は二百年以前の書にて、皆かな書なり、汝といふ事を御辺とあり、其の後お手前と呼ぶ、また貴様と云ふ今は武家に至るまでお前と称するが如し、譬の諺に云く、お前敬薄、同輩に向ってお前と云ふ事、諂者なる事を云ふ、亦云く、此の書は西洋書にて、シンネベールと云って譬論なり、いま和蘭の書を学ぶ者解しがたき辞にして、二百年以前西洋の学をする者ある事を知るべし。^⑦

この箇所にはいくつかの問題点がある。特に、江漢は何語の『伊曾保物

語』をみたのかということである。「皆かな書なり」というのは、もし国字本『伊曾保物語』、つまり「原本」の日本語訳を指すとすると、「其の原本紀州侯こうにあり」の「原本」というのはヨーロッパ語の本を指すとされる。ただ、司馬江漢はこれが「いま和蘭の書を学ぶ者解しがたき辞にして、二百年以前西洋の学をする者ある事を知るべし」と記しており、「原本」は「和蘭の書」ではあるがオランダ語の書ではない可能性もある。つまり、「和蘭の書」とは「西洋の書」と解釈できるのであろう。または、「解しがたき辞」がローマ字であるが、オランダ語ではなくラテン語かフランス語の文を指す可能性もない訳ではなかろう。^⑧ 残念ながら今日までは紀州侯徳川家の文庫にあたる南葵文庫なんきぶんこに、『伊曾保物語』の「原本」となり得る本はまだ発見されていないようである。^⑨

「シンネベール」

ここで特に面白いのは、司馬江漢がヨーロッパの比喩的な画を「シンネベール」といっていることである。『春波楼筆記』の同じ箇所のもう一つの注意すべき点は「此の書は西洋書にて、シンネベールと云って譬論なり」という部分である。江漢は、イソップ寓話アレゴリーとは寓喩のようなものと認め、オランダ語「シンネベール」(zinnebeeld、ジンネベールト)という語を使って西洋寓話の本質を定義する。その上、江漢は既に『おらんだ俗話』(寛政十年(1798)奥書)に、「シンネベール」のたとえ話に必ず画像が付いていると書いている。

惟学ものハ聖人ニなり易し、然ニ民俗野人其理を曉し得かたし、故に是ニ教ゆるに喩たとへを以て導く、和蘭これを「シン子ベール」と云、多くハ画図を以て曉さしむ、画ハ其物の形ちある物故ニ、文字をも知らざる者にも能く解して、かてんゆくなり^⑩

「シンネベール」を別名で言えばエムブレムともいう。松田清氏が示したように、蘭学者が「シンネベール」を、たとえ話と絵とが一緒に教訓的な役をは

たすものと解していた事を明らかにする当時の史料は他にもある。^① 蘭和辞典の『ドーフ・ハルマ』（文化十三年（1816）までに成立）に、「Zinnebeeld. Mono nazoraje Kosirajetar Zoo」（シンネベール。もの準えて拵へたる像）と説明している。または、蘭学者大槻玄沢（1757-1827）旧蔵本と推定される *Leerzame zinnebeelden* というエムブレム・ブックに、その書名を手書きで「譬喩ノ教戒書乎」と解釈するところもみられる。すると、文化年間には「シンネベール」が教訓を目的とする文を伴う絵を指す、という観念がすでに周知の事実になっていたということになる。

シンネベールという組み立ての「機械」

ヨーロッパにおいて「シンネベール」というエムブレムは特定のものであった。『エソポのファブラス』が発行された16世紀に、ヨーロッパでは寓話のある特別な典型が盛んになっており、非常に多数出版された。それが「エムブレム」emblem（オランダ語「エムブレイム」emblemまたは「シンネベール」）で、その大半はラテン語ではなく、自国語のものである。エムブレムは教訓をたとえ話と絵との形で紹介する。エムブレムという組み立ての「機械」は次のような「三要素」の部品からなる（図1）。

1. モットー motto（ラテン語）：金言、標題。「モットー」は、近世日本でも流伝されたオランダの詩人・銅版画家ヤン・ルイケン Jan Luyken（1649-1712）の1694年初版エムブレム集『人間の業』^{わざ}（*Het Menselyk Bedryf*）の如く、よく標題のタイトルとしてみられているとともに、エムブレムの教訓的金言になる事も多い。
2. ピクチュラ pictura（ラテン語）：絵。古典に基づくものが多い。
3. スブスクリプチオ subscriptio（ラテン語）：警句、絵の下の解説、短い碑文。韻文が多い。

近世日本で流布されたエムブレムが、絵の pictura と文の subscriptio を両方含まなければシンネベールにはならないと認識している江戸蘭学者が、エムブレ

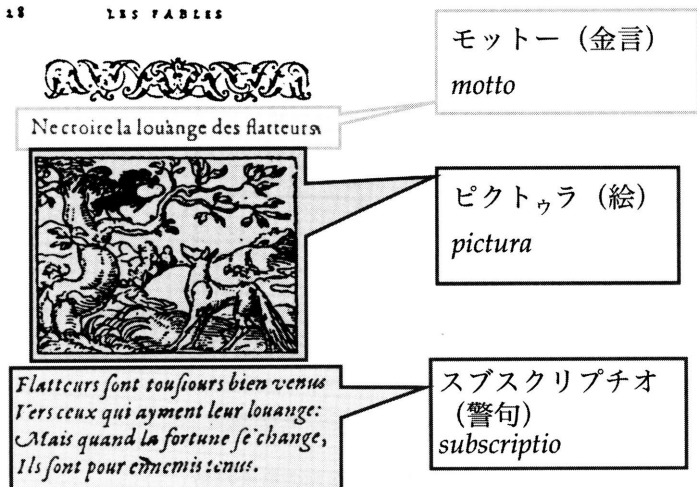


図1 エムブレムの三要素

ムが三要素からなるのを認めていたかは不詳である。だが、司馬江漢の『訓蒙画解集』は蘭学者のシンネバール理解を少しでも明らかにできると思われる。

『訓蒙画解集』の構成

自筆本しかない江漢の『訓蒙画解集』は、文化十一年（1814）七月に完成したもので、九十二話そしてそれに附録した二十五話の話集である。その原点はたいいてい中国古典であるが、『伊曾保物語』に基づいたものもある。¹²面白いのは、イソップ寓話の逸話も漢文になっている。漢訳したのは不明であるが、もしかして江漢自身であろうか、または中国イエズス会のものであろうか。「訓蒙」は子供や初心者に教えさとするための書物をさし、「画解」は画で解く意味であり、その書名は絵を使いながら古典的な逸話を啓蒙しようとしたが、目的はどの程度まで教訓であったかどうかは判断しにくいのである。

『訓蒙画解集』の特異な特色はその要素の紙面構成にある（図2）。毎話は漢文の原文と、和文の解釈と、絵とからなっている。序文に「古人の遺言数十話、
コシイ ケンスウシウワ



『訓蒙画解集』の紙面構成

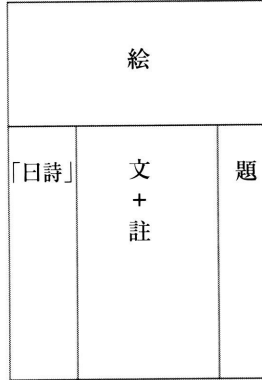
図2 『訓蒙画解集』の紙面構成

ヒソカスウケン シリエ フ ロク シモ カタワラ カ ナ モツテカイ タイ クンモウ
 小子窃数言を後に付録して、下に画をなし、傍に国字を以解し、題して訓蒙
クワカイシウ
 画解集とし」と書いてある。すると、漢文は古人の遺言、和文は解、絵は画に
 あたると理解してよいであろう。ちなみに、江漢は『伊曾保物語』も「古人の
 遺言」とみ、漢文にしている。

『訓蒙画解集』に二つのタイプがあるといえ、ここでそれを甲(A)と乙(B)タイプとする。両タイプとも漢文は古典引用で、違いは和文の役割にある。『訓蒙画解集』甲(A)タイプでは和文が意訳(試訳)・注釈になっている。^⑬乙(B)タイプでは和文が解釈とともに道德的説明をする。^⑭

手本の可能性のある他の書物

もちろん、江漢が絵と文との組み立てで「訓蒙」を作る手本として、ヨーロッパのエムブレムしかあり得ない訳ではなかった。日本にも手本になりそうな書物もいくつかはある。ここで全く無作為抽出して司馬江漢が入手し得た二冊をあげ、簡単に触れておきたい。『訓蒙画解集』との差は確かにある。例えば、享和元年(1801)『蒙求図会』(下河辺拾水画、吉備祥顕考訂)は挿絵の啓



『初願日記故事 註釈全像二十四孝』（明板）

図3 『註釈全像二十四孝』構成

蒙書ではあるが、中国古典『蒙求』に取材しているのに完全に和文でかかっている。加えて絵と文は別のページに載っている。また、江戸中期の『絵本二十四孝』^{えほんにじゅうしこう}（鳥居清経画）^{とりいきよつね}の場合、絵と文は同じページに載っているが完全に和文である。蒙求図絵や廿四孝のような啓蒙書の影響はあるであろうが、それらは漢文と和文が混じったものではない。それよりも『訓蒙画解集』の紙面構成に近いのは『註釈全像二十四孝』^{ちゅうしやくぜんしやうにじゅうしこう}のような教戒書であろう（図3）。明代の版本であるが日本では流布した漢文のもので、絵、題、文と注、及び詩の「四要素」構成になる。

江漢のシンネベール集『訓蒙画解集』

司馬江漢が「シンネベール」またはエムブレムをどう取り上げたのかを知るには、『訓蒙画解集』がその恰好の材料となる。その形式は、寓話と言えらたとえ話の漢文の傍らに和文（国字）^{カナ}による説明と、その下に絵を組み合わせたものである。『訓蒙画解集』は、たとえ話と絵とを結びつける自筆寓話集であり、「シンネベール」を実行に移した作品だと言える。『訓蒙画解集』の序文で江漢

はシンネベールの優れた点を挙げている。その一つは江漢がことあるごとに力説するローマ字の便利さで、もう一つは教訓の話かなを絵（画）と分かり易い国字で解説してあることである。

カノクニ ゴ 彼国の語にシンネベールと云つて、タトヘ モツ オシ 譬を以て教へとす、セイジン トウトク キョウ 聖人道德経と
ラナ カルカユヘ イマコ、 同し、コ シン 故に今爰に古人の遺言数十話、イ ケンスウ シウ ワ 小子窃数言を後に付録して、下に
画をなし、カタワラ カ ナ 傍に国字を以解し、モツテカイ 題して訓蒙画解集とし、タイ 童蒙の眠を覚んと
て之コに云フのミ^⑮

つまり、『訓蒙画解集』は、漢文の原典と、かなまじりの和文と、絵とで組み立てた啓蒙書である。江漢は積極的にシンネベールの概念を日本の状況に応用した。言ってみれば、和風「シンネベール」集である。

『訓蒙画解集』の紙面構成の三要素は、漢文が「古人に遺言」、和文が「解」、そして絵が「画」で、それぞれの役割は違っている。その点では江漢の訓蒙集は日本ではやっていた啓蒙書とは異なるものであるが、エムプレムのモットー、スプスクリプチオ、ピクチュラに倣ったものであるとは判断できない。序文に書いてあるように、逸話の漢文が理解しがたく、「童蒙」に「眠ネムリを覚サマサん」とするため、かな文で解釈しなくてはならない。十年前発表された文化9年（1812）以下の佐賀鍋島藩士山嶺やまりょうしゅめ主馬（1756-1823）宛の書簡にも、司馬江漢は既に『訓蒙画解集』に関しての計画、そして漢文と和文の比較を主張（強調）している。

此様なる事を六十七集、下に画をなし傍、国字、以解し、訓蒙画解集と名、初、自序し、寫、申候て上度候。後々ハ京へ遣、板行ニもなるべし。^⑯

江漢は京都で『訓蒙画解集』を板行する予定であったが、とうとうその夢を

実現できなかったことは確かに残念なことである。

まとめの代わりに

以上、簡単にまとめてみると、司馬江漢のシンネベール（エムブレム）の理解に関しては以下の点を確認しておきたい。

- 他の蘭学者と同様に、江漢はシンネベールをヨーロッパ思想・教戒を理解するための大事な手がかりと認めていたこと
- シンネベールは譬喩または譬えを中心にする文と絵（画）で組み立てられた「機械」であること
- 寓話はシンネベールの大事な材料であること
- ヨーロッパ寓話は中国故事と同じ分類になっていること
- 『訓蒙画解集』は江漢が積極的にシンネベールの概念を日本の状況に応用した結果であること
- 手本はヨーロッパのエムブレムと近世日本にはやっていた啓蒙書であり得ること

さらに現段階で下記の問題を提起したいと思う。

- 江漢はエムブレムの三要素構成は理解していたのか
- 遠近法、油絵、銅版画と同様に、江漢はシンネベールを「究理」の技術と評価していたと言えるか

[注]

- ①『紅毛雑話』、早川順三郎編『文明源流叢書1』所収、国書刊行会、1913年、364ページ。
- ②『西遊旅譚』巻之三、『司馬江漢全集』第一巻所収、八坂書店、1992年、108-109、112-113ページ。
- ③『独笑妄言』、『司馬江漢全集』第二巻所収、八坂書店、1993年、15ページ。
- ④その図は、www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/ga_yogaku/list_02.html 早稲田大学「洋学（蘭学）コレクション」の18号（文庫8 B141（5））参照。
- ⑤『春波楼筆記』、『司馬江漢全集』第二巻所収、八坂書店、1993年、70ページ。
- ⑥江戸書名は普通「訓蒙」を「きんもう」とよむが、江漢自身が「題して訓蒙画解集とし」た。『訓蒙画解集』「序文の訳言」、『司馬江漢全集』第二巻所収、八坂書房、1993年、170ページ。
- ⑦『春波楼筆記』、90-91ページ。

- ⑧昭和四年(1929)に発表した論文で新村出氏は江漢のみたイソップ寓話を「蘭文の原書」であるとし、「その文章が蘭学隆盛時代に詠まれた所の蘭文よりも古風で解しがたい所があること、という意味ではないかと私は推察する」と述べている。新村出著「影模蘭文古版『絵入伊曾保物語』の断簡」『新村出全集』第七卷所収、筑摩書房、1973年、466-467ページ。もう一つの可能性として、江漢が天草版『エソポのファブラス』を見たこともありえるが、彼が、それがローマ字で書かれた日本語訳であることに気がつかなかったとは信じがたい。この論争点について鳥居由美子先生に貴重なご示唆をいただいた。記して感謝致したい。
- ⑨紀州藩校旧蔵書を引き継いだ紀州藩文庫(和歌山大学付属図書館)でもそういう本が発見されていない。菅野陽「司馬江漢と伊曾保物語」『蘭学資料研究会研究報告』308号(1976年)、143ページも参照。
- ⑩『おらんだ俗話』、『司馬江漢全集』第三卷所収、八坂書房、1994年、122ページ。
- ⑪松田清著『洋学の書誌的研究』臨川書店、1998年、特に8-11ページ参考。
- ⑫26話は『文選』、6話は『呂子春秋』、『劉子新論』、『淮南子』、5話は『韓非子』、『史記』、『伊曾保物語』、など。菅野陽校柱『訓蒙画解集・無言道人筆記』、東洋文庫309、平凡社、1977年、324ページも参照。
- ⑬甲タイプとして、『訓蒙画解集』第六十に話の漢文の「東坂云 同舟而遇風則胡越可使相扶如左右手」を、和文でまず注釈の「胡ハ北国、越ハ南方の国故、人疎遠にして中あしきを胡越と云。」に、意識の「難風におう時ハ胡人も越人も共に相扶けすくうなり」をつける。『訓蒙画解集』、『司馬江漢全集』第二卷所収、八坂書房、1993年、234・314ページ。
- ⑭例えば、『訓蒙画解集』第五話の漢文「劉子新論云 貨美錦于市。盜於衆中而窃之。使執而問曰。汝何盜錦于衆中。対曰。但見有錦。不見有レ人。故取之耳。」を、和文で「小人ハ己を利する事のみをして大胆なるふるまい己になんの来ることを知らずが身の亡ぶるをしらず」にする。珍しく、挿絵説明もあり、「市中の人の中にて盗錦をぬすむ」という。『訓蒙画解集』、『司馬江漢全集』第二卷所収、八坂書房、1993年、175・299ページ。中国、南朝の劉晝(516-567)撰『劉子新論』(十卷)は『訓蒙画解集』の六話のもとになる。
- ⑮『訓蒙画解集』「序文の訳言」、『司馬江漢全集』第二卷所収、八坂書房、1993年、170ページ。
- ⑯神崎順一著「司馬江漢『訓蒙画家集』をめぐる自筆書簡について：天理図書館所蔵日欧交渉資料(五)」、『ピブリア』112号(1999年)、34ページより引用。

* 討議要旨

小峯和明氏は、イソップ寓話は十七世紀に中国でも翻訳されており、それを漢文として江漢が引用した可能性は考えられないのか、と質問した。それに対してスミッツ氏は、指摘のとおり中国にも漢訳イソップ寓話が存在していたが、それを江漢が入手できたのかどうかは証明できない。しかし『春波楼筆記』にあるように、徳川家の蔵書を介して『伊曾保物語』を知り、江漢なりにエンブレム(シンネベル)を理解し、自ら寓話集を執筆したいという強い思いを抱いていたことは確かだ。江漢は漢文についても筆が立ったようなので、本人が訳した可能性も捨てがたい、と回答した。

ロバート・キャンベル氏は、『春波楼筆記』に記されている紀州の原書の「かな書き」とは、ローマ字の和文という意味合いで書かれた可能性はないのか、と訊ね、スミッツ氏は、ラテン語やフランス語の本ではないかという説もあるが、キャンベル氏の指摘も念頭に置きつつ再検討していきたい、と答えた。

アニタ・カナナ氏は、①江漢はオランダ語の文字は読めたが、概念を十分に理解し得るほどの語学力がなかったのではないかと、②「鳥獸戯画」などの影響は考えられないのか、と問うた。それに対して

スミッツ氏は、①江漢は直接蘭学者と交流し、大槻玄沢の指導を受けて自分でオランダの書物から銅版画の技術を学んだことは定説である。それらが事実であればオランダ語はかなり理解できたと思われる、②まったく関係がないとはいえないが、中世の文献なので判断しがたい、と答えた。